

## 「橋めぐりツアー」の実施による橋への魅力に関する意識変化 —東京下町の橋を対象にして—

日本大学 学生員 ○大沼 史成  
 日本大学 学生員 竹村 恭平  
 日本大学 正会員 伊東 英幸  
 日本大学 正会員 伊東 孝

### 1. 目的

近年、橋は水辺への関心とともに、観光資源としてあらためてその魅力に気づき重視されるようになってきた。船で川を移動しながらいろいろな橋を見学する「船による橋めぐり」が各地で行われ、これに参加した一般市民などは地域の魅力を再認識していると考えられる。

本研究では「船による橋めぐり」に参加した市民にアンケート調査を行い、橋に対する意識が「船による橋めぐり」の前後においてどのように変化しているのかについて、共分散構造分析を用いて評価することを目的とする。

### 2. 調査対象としたツアーの概要

平成19年7月21日と9月22日の両日に「隅田川の右岸と左岸をめぐるグランドツアー」（以下、橋めぐりツアー）が「勝鬨橋をあげる会」の主催で行われた。本研究では、このイベントに参加した市民を対象にアンケート調査を行った。参加者は2回とも約40人程度である。橋めぐりツアーは勝鬨橋を起終点とし、図-1のコースを伊東（孝）のガイド付きで4時間ほどかけて約80の橋を見学するものである。



図-1 ツアーコース 写真-1 ツアーの様子



### 3. アンケート調査の方法と概要

それぞれの参加者を対象に出発前と到着後に同じアンケート項目で調査をおこない、橋めぐりツアー

前後の意識変化について分析した。調査項目に関しては、橋の魅力に関係していると考えられる「情報」「外観」「周辺環境」を13項目に分類して設計した（図-3）。回答は関心が「非常にある」～「全く無い」の7段階で評価し、「非常にある」を7点、以下1点まで点数化し分析した。アンケートでは、橋めぐり橋めぐりツアーに対する意見や感想についても尋ねた。有効サンプル数は69、内訳は男性34人、女性35人である。

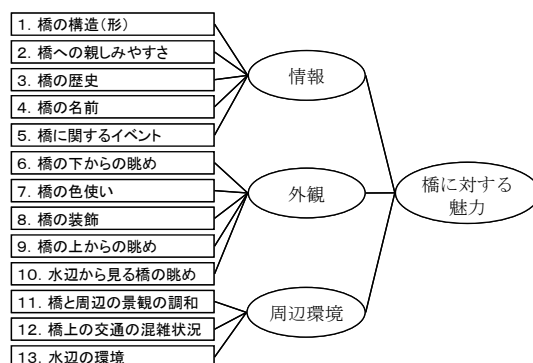


図-3 調査項目の概念図

### 4. 結果と考察

#### 4-1 アンケート結果と考察

アンケート結果から「水辺から見る橋の眺め」「橋と周辺の景観の調和」の平均点が高く、船からの橋の眺めに興味があると分かる。表-1は橋めぐりツアーの実施前後での意識変化の差が最も大きいものから並べたものである。一番大きな差がみられたのは「橋上の混雑状況」であった。次は「橋に関するイベント」であり、今回橋めぐりツアーに参加したことによってイベントに対する関心が高まったと考えられる。その一方で、あまり差が見られなかったのは「橋と周辺の景観の調和」「水辺から見る橋の眺め」であり、この理由として出発前から関心が高かったためと考えられる。

キーワード 共分散構造分析, 橋めぐりツアー, 観光まちづくり

連絡先〒274-8501 千葉県船橋市習志野台7-24-1 日本大学理工学部社会交通工学科都市環境計画研究室 TEL 047-469-5239

表-1 平均点の差

| No | 項目         | 出発前   | 到着後   | 差     |
|----|------------|-------|-------|-------|
| 12 | 橋上の混雑状況    | 4.806 | 5.551 | 0.745 |
| 5  | 橋に関するイベント  | 5.417 | 6.058 | 0.641 |
| 3  | 橋の歴史       | 5.817 | 6.232 | 0.415 |
| 1  | 橋の構造(形)    | 5.863 | 6.246 | 0.383 |
| 2  | 橋への親しみやすさ  | 5.887 | 6.203 | 0.316 |
| 6  | 橋の下からの眺め   | 6.000 | 6.275 | 0.275 |
| 8  | 橋の装飾       | 6.068 | 6.290 | 0.221 |
| 7  | 橋の色使い      | 5.781 | 6.000 | 0.219 |
| 4  | 橋の名前       | 5.945 | 6.145 | 0.200 |
| 9  | 橋の上からの眺め   | 6.143 | 6.261 | 0.118 |
| 13 | 水辺の環境      | 6.194 | 6.246 | 0.052 |
| 11 | 橋と周辺の景観の調和 | 6.389 | 6.435 | 0.046 |
| 10 | 水辺から見る橋の眺め | 6.458 | 6.464 | 0.005 |

#### 4-2 平均点の順位と比較と考察

出発前と到着後でどのように平均点の順位が変動したかについて示したものが表－2である。「水辺から見る橋の眺め」「橋と周辺の景観の調和」は出発前から関心が高く、到着後と比較しても順位の変化はなかった。

大きく順位が上がった「橋の装飾」「橋の構造(形)」は船から橋をじっくりと見たため、形や装飾といった橋の見た目に関する項目が上がったと考えられる。

順位の下がった「水辺の環境」は川の水が汚かったため、参加者の評価が下がったと考えられる。「橋の名前」は橋の名前への関心が上がる要素が少なかったため順位が下がったと考えられる。

表-2 平均点の順位

| 出 発 前 |            |       | 到 着 後 |            |       |
|-------|------------|-------|-------|------------|-------|
| 順位    | 項 目        | 評価    | 順位    | 項 目        | 評価    |
| 1     | 水辺から見る橋の眺め | 6.458 | 1     | 水辺から見る橋の眺め | 6.464 |
| 2     | 橋と周辺の景観の調和 | 6.389 | 2     | 橋と周辺の景観の調和 | 6.435 |
| 3     | 水辺の環境      | 6.194 | 3     | 橋の装飾       | 6.290 |
| 4     | 橋の上からの眺め   | 6.143 | 4     | 橋の下からの眺め   | 6.275 |
| 5     | 橋の装飾       | 6.068 | 5     | 橋の上からの眺め   | 6.261 |
| 6     | 橋の下からの眺め   | 6.000 | 6     | 橋の構造(形)    | 6.246 |
| 7     | 橋の名前       | 5.945 | 7     | 水辺の環境      | 6.246 |
| 8     | 橋への親しみやすさ  | 5.887 | 8     | 橋の歴史       | 6.232 |
| 9     | 橋の構造(形)    | 5.863 | 9     | 橋への親しみやすさ  | 6.203 |
| 10    | 橋の歴史       | 5.817 | 10    | 橋の名前       | 6.145 |
| 11    | 橋の色使い      | 5.781 | 11    | 橋に関するイベント  | 6.058 |
| 12    | 橋に関するイベント  | 5.417 | 12    | 橋の色使い      | 6.000 |
| 13    | 橋上の混雑状況    | 4.806 | 13    | 橋上の混雑状況    | 5.551 |

## 5. 共分散構造分析によるモデル構築と考察

調査項目概念図より『情報』『外観』『周辺環境』を潜在変数として、観測変数を類型化し構造モデルを構築した。GFI も高い結果となり、構造モデルの当てはまりが良いと判断した。

出発前の魅力への影響は『外観』が主であり、表-2を見ても順位の高い項目は『外観』が占めている。これは参加者が船から橋を見ることを目的としていて、橋の見た目に関心があるといえる。

到着後は、魅力に影響する3つの潜在変数の相関係数がすべて1.0となり潜在変数の影響力が高まった結果となった。

橋めぐりツアー実施前後を比較すると、『情報』の因果係数は、出発前では「橋の構造（形）」「橋の歴史」が高かったが、到着後では「橋への親しみやすさ」「橋に関するイベント」が高かった。これは橋めぐりツアーに参加したことで橋を身近に感じ、親しみを持つようになり、橋に関連するイベントに関心を持つようになったためと考えられる。

『外観』の因果係数は、出発前では「橋の装飾」「橋の下からの眺め」が高かったが、到着後は「橋の上からの眺め」「水辺から見る橋の眺め」が高かった。これは船から橋を見たことで、ふだんは意識していなかった「橋の上からの眺め」に関心をもつようになったためと考えられる。

『周辺環境』の因果係数は、出発前では「水辺の環境」「橋と周辺の景観の調和」が高く、到着後も「橋と周辺の景観の調和」が高かった。

以上のことから船による橋めぐりでは、日常とは違った視点場からの風景が見られることによって橋の新たな魅力を発見し、これによって参加者の橋に対する関心が増す効果があることがわかった。

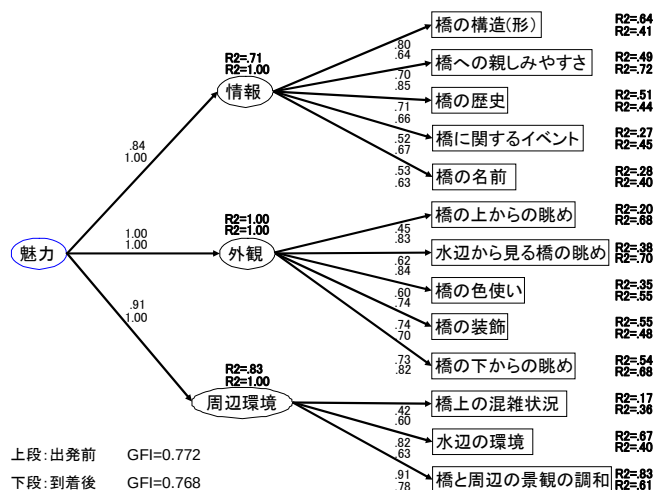


図-4 船による橋めぐりの構造モデル

## 6. おわりに

本研究では橋めぐりツアーの参加者を対象として、橋への魅力がどのように変化したのかについて定量的な把握を行った。今後はこの結果を踏まえ、橋をまちづくりに活かす方法などについて検討したい。

【謝辞】本研究は、「勝鬃橋をあげる会」をはじめとする多くの方々にご協力頂きました。ここに感謝の意を表します。